

## 第 2 4 回全国大会岡山大会基調提案

NPO法人・全国ことばを育む会理事  
田 辺 昭 夫

### 1. はじめに

この全国大会は、3月11日午後東北地方を震源とし、東日本の広い範囲を襲った大地震と大津波、東京電力福島第一原子力発電所の事故の後、五か月を経て開催されます。私たちの会の一員である東北・関東地方の「親の会」の会員、特別支援学級や通級指導教室に通っている子ども達、教育・福祉関係者のなかには、今回の大災害によって尊い命を奪われた方々、学校をはじめ教育施設が破壊され満足な教育活動が回復できずにいる地域や学校、今なお避難所での不自由な生活を余儀なくされている方々が相当数に及びます。私たちの会は、「慰め合い、励まし合い、支え合うこと」を会発足の原点としてきました。この大会もこの原点を中心に据えて、国難ともいふべき事態から立ち直り、子ども達の笑顔と「ことばの教室」をはじめ教育の営みが生氣を取り戻し、復興することを共通の願いとしたいと思います。

### 2. 障がい児の福祉・教育をめぐる情勢と子ども達の周辺

1981年に始まった「国際障害者の10年」をへて、障がい者の社会への「全面（完全）参加と平等」を求める運動は大きく高まり、障がい児の福祉・教育は大きく、豊かに発展してきました。国際的には2006年に「障害者権利条約」が国連総会で全会一致採択され、日本国内の批准に向けた関係者の検討が急がれています。国民の社会生活全般にわたっていっさいの差別をなくし、障がい者の生活と権利を保障していくことが財政的、人的な制約を持ちつつも当然のこととして受け入れられるようになりました。

障がい児の教育では、「特別支援教育」が今年で五年目を迎えて、従来の身体障がい児、知的障がい児、精神障がい児に加えて、発達障がい児を教育の対象として大きな広がりを作っています。平成16年に「発達障害者支援法」(平成20年一部改正)が制定され、その第2章で「児童の発達障害の早期発見及び発達障害者の支援のための施策」が明確にされたことによるものです。

このような社会全体の障がい者観の発展や「特別支援教育」の望ましい理念の確立の一方で、障がい児とその家族の願いに十分に答えるだけの条件整備は決して十分とはいえません。全国各地に通級指導教室はかなりの速度で設置されていますが、障がい児のニーズに応じた教育条件の整備は未だに不十分です。利用者に一割の応益負担を課す「障害者自立支援法」にかかわる「障害者総合福祉法」の制定もこれからです。

その主な原因は、第一に国や地方自治体の財政が貧しく、先生や職員の配置、障がい者施設や学校への条件整備が満足に進まず、東日本大震災が現状をいっそう困難にしています。

第二に、健常の人々にとっても就職が困難な中で、障がい者の「就労」はますます困難となっていることなど、子ども達の進路の選択にも課題が山積しています。

一方、子ども達を取り巻く環境は、国際連合の「子どもの権利委員会」からの再三の警告にもかかわらず、すべてを競争に委ねる新自由主義的な教育がすすみ、様々な面でハンディキャップをかかえた子ども達の毎日を「生き難い」ものにし、一人一人の子ども達が「自己評価」(自己肯定観)を育むことを困難にしています。子育ての展望を失った若いお母さんの増加、いじめや不登校、児童虐待が後を絶ちません。

こうした厳しい社会環境の中で、親達も「いかにして子ども達の良さを評価し、伸ばしていくか」「こどもたちに安心感を与える毎日をどう作っていくか」で悩み、その悩みを如何に解決するかを切実に求めています。

### 3、私たちの会の歩み、今後の展望

私たちは、子ども達をめぐる環境が厳しいからこそ「親の会」を作って、悩みを一人ぼっちで抱え込まずに、グチをこぼし合い、慰め合い、励まし合って今日まで47年間活動を進めてきました。「慰め合い、励まし合い」こそが親の会の原点です。そしてその活動の側に、いつも子ども達の教育を担当する先生方の暖かい眼差し、懇切な支援がありました。

私たちの会の前身「全国言語障害児をもつ親の会」は、今から47年前（昭和39年）の8月東京で産声を上げました。この間、各地の親の会の結成には「ことばの教室」の先生方の熱心な援助がありました。結成間もない「親の会」は、当時まだ学校教育法など教育関係法令に明記されていない「通級」を制度化するために、各地の教育委員会と熱心な話し合いを繰り返し、「通級」の制度化のために奮闘し、各地に「ことばの教室」「きこえの教室」設置の要求を掲げて、奮闘してきました。

親・親の会と先生との関係は、今日では「子どもを真ん中に親と先生が三人四脚で一步一步すすもう」という合言葉となっています。全国の活動は、多面的でその地方によって違いもありますが、活動がうまく進み、会員が拡大している会の特徴は、親の会と先生との関係がスムーズにしていること 会員の悩みや要求が会の活動によく反映していること 『ことば』や『両親指導の手引き書』でよく学び合っていること が共通しています。

今後の活動を展望する上でも、この三点を踏まえた活動が求められます。また「特別支援教育」が全面的に展開するなかで、会の構成や活動を障がいの種別や程度で区別しないこと、幼児期 小・中学校の時期 後期中等教育・高等教育 就労の時期へと「縦の連携」を考えていくことなどが課題です。

### 4、全国大会（岡山大会）の運営の基調

以上のことから今回の全国大会運営の基調を次のように進めることにします。

第一に大会スローガン「通い合うところとことば」について、大会の話し合いの中でしっかり深めあうことです。子どもと親、子どもと先生、親と親、親と先生の関係で、「ところ」と「ことば」が通い合う関係を作ろう、そんな地方と日本を作ろうという話し合いです。「時代閉塞」という言葉がはやり、「ところ」と「ことば」が通い合いにくい今の日本社会の現状に風穴をあける大会にしたいものです。

第二に、そのために親の会はどんな活動を進めたらよいのか、親の会は先生のご支援、ご協力をどのように受け止めたらよいのかを話し合うことです。

第三に、参加者全員が発言して、元気を出して帰れるように「交流会」は小規模にされています。みなさんが「思いのたけを出し合おう」「胸の内を吐き出そう」という気持ちで、楽しく、肩の力が抜けるような大会にしたいものです。

第四に、東北、関東地方の参加者のみなさんの意見に耳を傾け、大震災の被災地のみなさんの声をしっかりと受け止めましょう。

二日間の短い時間ですが、この大会を通して全国のお父さん、お母さんの新しい運動が芽吹き、NPO法人・全国ことばを育む会の大きな飛躍に繋がることを期待するものです。